

# 津波越えた船 有終の遊覧



「みやこ浄土ヶ浜遊覧船」の船長を務めてきた坂本繁行さん（昨年12月、岩手県宮古市）

## 岩手、地震直後に沖合退避 船長、感謝の思い胸に



三陸沿岸の代表的な勝地、岩手県宮古市の浄土ヶ浜で観光を支えてきた遊覧船が1日にラストランを迎える。「寂しいが、お客さんには良い思い出にしてもらいたい。約90年間船長を務め、東日本大震災直後に1隻を沖へ逃がし津波から守った坂本繁行さん（72）は感謝を胸に海に出る。

「もともと早くこの仕事をしたかった。宮古市内の水産高校に進学し、20歳から貨物商船の航海士として世界を回った。1年のうち10カ月は船上。家族のそばにいたいと思い、38歳で遊覧船を運航する岩手県北自動車（盛岡市）に入社。約5年で船長になった。

「船はそれぞれ性格が違って癖がある」といっ

のが持論。手入れすればするほど愛着が湧いた。乗客が酔わないよう、風や波を注意深く見て、航路やスピードを調整する。地元の人も含め船から見える景色を見て笑顔になってもらえることが、何よりのやりがいだった。

2011年3月11日。午後の運航を終え、船を下りたとき同僚が事務所

から慌てて出てきた。「地震だ！」。船を沖に逃がさなければと思った。当時、会社が保有していたのは3隻、小型船1隻は岩手県山田町で停泊中、大型船1隻も宮古市内で点検中はいずれも被災した。約400人が乗ることができる別の大型船「第16号丸」（109トン）が唯一、浄土ヶ浜

にあって、すぐに船に戻り、エンジンをかけ直し、地震から10分もしないうちに船着き場を出た。

浄土ヶ浜から約6キロ離れた沖合で約4時間過ごした。「復興には時間がかかる。再開しても誰も来ない」と思った。約4カ月後の再開日、茨城県

から来てくれた人がいたことに驚いた。「その気持だけでうれしかった」と顔をほころばせる。遊覧船は1962年開業。ウミネコの餌付け体験などで人気を集めたが、団体旅行の減少などが、団体旅行の減少などに伴う赤字の常態化や船の老朽化を理由に岩手県北自動車は2020年7月、運航終了を発表した。

存続を求める声が上がった。宮古市は20年12月、顔を見守りたい。今はその気持ちしかない。

復活させる方針を明らかにした。「もう年だし、乗ることはないと思うが、復活はうれしい」と坂本さん。乗客が船着き場に行くとくるとすかさず出迎えに走る。「安全に人生を懸けてきた」との自負が全身からあふれる。最終日まで笑顔を見守りたい。今はその気持ちしかない。